

インクルーシブ教育学のための対話的教育の実践と課題

ー英国対話的教育研究の報告から日本での対話的教育の可能性ー

企画者・司会者：荒巻 恵子（帝京大学）

話題提供者：HENNESSY Sara（ケンブリッジ大学）

KERSHNER Ruth（ケンブリッジ大学）

TRIGO-CLAPÉS Ana Laura（ケンブリッジ大学）

指定討論者：司城 紀代美（宇都宮大学）

池田 彩乃（山形大学）

楠見 友輔（立教大学）

KEY WORDS: インクルーシブ教育学, 対話的教育, 教師の専門性

【企画趣旨】

学校教育において生徒の多様性を受け入れる「インクルーシブ教育学」は、教室での学習が本質的に社会的かつコミュニケーション的なものであることを認識しつつ、教師が専門的な知識を用いて生徒一人一人に対応することが重要であるという信念に基づいている。対話的な相互作用とクラスの関係性は、帰属意識、相互尊重、積極的な参加、異なる見解や知識を取り入れた共同学習を構築する上で重要であると考えられている。このようなアプローチは、すべての子どもたちを対象とした一般教育において、ますます重要になっている。対話的教育における多様性の媒介変数、交差変数としては、民族、文化、言語、貧困など、個々の子どもの状態に影響を与える問題や、教師の専門性の違いなどが考えられる。インクルーシブ教育学は、教師の伝統的な教育活動を利用し、それを拡張するものである。教師は、子どもたち一人ひとりの経験や環境の強みと課題に目を向け、明らかな課題を学習の障害と認識しながら、主に子どもたちの潜在的な強みに焦点を当てることが求められる。これは、すべての子どもたちがよりよく生き（well-being）、他の人たちと一緒に学ぶ（co-agency）ことを支援するという目的を支えるものである。

インクルーシブ教育学の発展には、さまざまな状況下での多くの実践例を振り返ることが有効である。したがって、さまざまなインクルーシブ教育学アプローチを取り入れ、専門的な探求を促すような教師の継続的専門能力開発（CPD）が必要である。本研究の独自性と貢献性は、インクルーシブ教育学アプローチで新たに注目される対話的实践と専門的探求の関連性に焦点を当てていることである。本シンポジウムでは、英国のインクルーシブ教育学の実践例を紹介しながら、日本におけるインクルーシブ教育学のための対話的教育実践の可能性を日本と英国の研究者たちが探る。（英語通訳あり）

【話題提供者】

インクルーシブ教育学のための T-SEDA 対話的教育研究

< HENNESSY Sara, KERSHNER Ruth & TRIGO-CLAPÉS Ana Laura >

英国ケンブリッジ大学のチームは、まず、通常の教室を対象に、教師と子どもの間の会話や教室内の多様性に焦点を当て、教師がすべての子どもの学習を支援するための研究を行っている。教師主導の探究のために、Teacher Scheme for Educational Dialogue Analysis (T-SEDA) と名付けられた広範なリソースバックを開発し、10 カ国で 300 人以上の教師にテストを行った。これは、対話的で「インクルーシブな教育学」の教師の専門性開発のためのリソースを提供している。今回は、幼児期から高等教育までのすべての教育段階を対象とした大規模なトライアルについて

報告する。方法としては、アンケート調査、インタビュー、教師による反省的な質問を通じた授業実践の発展に関する報告などがある。その結果、教師の対話に対する意識が高まり、実践がどのように対話を支え、また妨げているのか、より対話型教授法の使用、生徒の対話的参加の増加などの変化が明らかになった。

また、ケンブリッジ大学の研究チームは、誰もが参加しやすい対話を促進するために、教師が使いやすいリソースの開発にも取り組んでいる。例えば、Ana Trigo-Clapés は、T-SEDA に基づいて、主な教室で自閉症の生徒がアクセス可能な対話を促進するための教師向けリソースを開発した。Trigo-Clapés は、自閉症によく見られるコミュニケーションや学習の形態に合わせて、対話型教授戦略を作成した。この教授法は、デザインベース研究の一環として開発されたもので、クラスの対話の内容と構造を明確にし、生徒が対話に貢献できるような機会を作ることを目的として、初等教育の教師と協力して教授法を作成し、試行錯誤しながら改良してきた。

【指定討論者の趣旨】

日本における対話的教育実践の可能性と課題

< 司城紀代美・池田彩乃・楠見友輔 >

新学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学び」が強調されている。しかし、日本の教育における対話という概念は「言語活動」として狭義に解釈され、行為の双方向性や主体同士の対等な関係性を示す概念であるダイアログという意味で理解されることは少ない（楠見, 2018）。対話を言語活動と理解することは、言語を有能に用いることに価値を置くことで、コミュニケーションや言語使用に困難を有する多くの子どもを学校教育から排除することに繋がる恐れがある。これに対して、英国のインクルーシブ教育学が重視する対話型教授において対話どのような意味を有するか、対話に価値を置くことによってなぜインクルージョンが実現されるのかを理解することには意義がある。

指定討論者の池田は肢体不自由児に、司城は通常学級や特別支援学級に在籍する軽度障害児に、楠見は特別支援学校に在籍する知的障害児に焦点を当てながら、これまで授業における子どもの学習についての研究を行ってきた。各研究者のこれまで行ってきた研究を踏まえ、インクルーシブ教育学における対話型教授を基にした実践を日本の文脈で展開する上での可能性と課題について検討する。

〈謝辞〉本研究は、文部省科学研究費助成事業基盤研究（C）2020-2023, 20K02976 の助成を受けたものです。

(ARAMAKI Keiko, HENNESSY Sara, KERSHNER Ruth, TRIGO-CLAPÉS Ana Laura, SHIJO Kiyomi, IKEDA Ayano, KUSUMI Yusuke)